取り組み20年。10%を超える雇用率

—ブリヂストンケミテック株式会社—

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子（写真）小山博孝

ブリヂストンケミテック株式会社
〒518-0603　三重県名張市西原町2350
TEL　0595-65-1121　FAX　0595-65-5101
URL　http://www.bridgestone-bsct.co.jp

※『働く広場』では通常「障害」と表記いたしますが、当該記事では、
ブリヂストンケミテック株式会社様の要望により「障害」を「障がい」としています。

20年の歴史で、工場の「一部門」に自立がキーワード

名古屋と大阪のほぼ中間、山々に囲まれた盆地、名張市に「ブリヂストンケミテック株式会社」の本社がある。ブリヂストンの100%子会社として、1971年に創業した。2009年に社長に就任した山口登さんにお話をうかがった。

「わかりやすくご説明しますと、大阪・名古屋地区の家具、寝具の素材（ウレタンフォーム）を作る会社として設立して、78年に自動車用シートの生産を始め、成長してきました。ブリヂストンでは『信頼と誇り』を大切に、『最高の品質で社会に貢献』を使命としています。私どもは製造専門で、営業はブリヂストン本体が行っていますから、親会社との協調を大事にしています」

来年、創業40周年を迎える。山口社長は、「ブリヂストンケミテックは国内の会社ですが、グループとしてはグローバル化を進めていますから、製造会社としてグローバル化を支える人材を育成していくことが役割だと思います。人を大切にする会社、地域に貢献できる会社にしたいですね」

ブリヂストンケミテックでは、90年から障がい者雇用に取り組み始めた。そのきっかけについて、山口社長は「障がい者雇用率を順法しようと考え、障がい者雇用を開始しました。歴代の社長がずっと関心をもってきたことが大切なのかと思います。私が着任したときには本格的に障がい者雇用が行われていて、何の違和感もありませんでした。欠点を見るのではなくて、その人の特性、いいところをどう伸ばしていくか、人に合わせた仕事作りは、健常者も障がい者も同じだと思います」

山口登代表取締役社長

山口社長は障がい者の仕事ぶりもよくご存知だ。

「20年の歴史がありますので、障がい者の人たちが働くプレセット工程は1つの部門という感じです。最近では、健常者と一緒の工程で働いている人もいますし、いいムードになっていると思います。自立をキーワードに、一人暮らしができるようにと考えて、2名は社宅に入っています。障がい者の皆さんからは、朝あいさつされたり、現場であいさつされたり、私が元気をもらっていますよ」

名張のほか、上尾（埼玉県）、横浜（神奈川県）、富士宮（静岡県）、防府（山口県）に工場があり、社員数691名、障がい者雇用率7・44%。本社に限ると社員数392名で、雇用率は10・61%に上る。ちなみに親会社の㈱ブリヂストンも、障がい者雇用率は2%を超えている。

次に、第1ステップから第7ステップまで、知的障がい者たちが「戦力」となってきた具体的な取り組みをご紹介する。

失敗の積み重ね試行錯誤から始まった

E／M製造部プレセット工程の中堀良子さん。社会福祉施設の指導員から入社して、障がい者指導員を務めている中堀さんは、「障がい者の人を施設から地域へ出していくときと、ブリヂストンの障がい者雇用とがちょうどうまくマッチングして、職場実習をさせていただいたんです。そのとき、私が担当の1人でした。本格的に障がい者雇用をしていくには専門の指導員が必要ということで入社しましたが、最初は大変で、企業と施設との違いに戸惑いました」

3名の知的障がい者が初めて入社した

プレセット工程（車輌用安全部品の加工工程）。このラインは全員障がい者だ

90年8月から92年3月までの第1ステップは、「失敗」の時期だったという。

「パートさんが60名ぐらい働いている自動車シートの仕上げ工程に障がい者の人を入れましたが、受け入れるほうもどう対応すれば良いかわからず、障がい者も働くということがわかっていなくて、職場の中が混乱して、あきらめかけました。当時の社長の『やりかけたことは最後までやれ』という一言で、みんなで知恵を出して、障がい者の人たちが頑張っただけの評価をしてもらえる職場作りをしようと考えました」（中堀さん）

障がい者の職場として、自動車シートの組み込み作業を軽減するための準備をする「プレセット工程」を作った。そこから第2ステップに入る。当時の中堀さんの思い。「私は施設の職員でしたので、障がい者の人だけが働く職場は隔離ではないかと悩みました。でも当時の社長が『1つの工程を持つのはどの部門も一緒。責任ある仕事をするのだから、隔離ではない』と言われて納得しました。もう1つ、会社の近くには歴史ある大きな障がい者施設があり、特別支援学校もありますので、地域への開放職場にして、職場実習を受け入れたいと思いました」

総務部主任部員の関岡幸男さんは、当初から受け入れ側を担当していた。「私は企業人ですから、中堀が悩んでいたのはわかっていたのですが、彼女が福祉の理念を組み入れて、企業との架け橋になることを望んでいました」

その後、1人の上司との出会いから、「孤独感でつぶれそうだった」という中堀さんは、自身の気持ちが変わり始めたと言う。

「『専門家がきたのだから任せておけばいい』という見方しかしてもらえなかったのが、3人目の上司から『80%はわからないから任せる。20%は一緒に考えるし、努力する』と言われ、すごい人がいるのだと思いました。『障がい者の人にあいさつしても、なかなか心を開かないのはなぜか』と聞かれ、『名前を呼んでくれたら、心を開くと思います』と話すと、すぐ実行してくれて、障がい者の人たちも心を開いてくれました」

関岡幸男総務部主任部員

障がい者指導員として勤務する中堀良子さん

福祉的な考えと企業の厳しさ。見解の相違で、中堀さんは本音のぶつかりあいもしたそうだ。「でも次の日はあっけらかんとして、今日も1日頑張ろうと。その上司が言ってくれたから、今の障がい者雇用があるのではないかと思います。企業の中での福祉の役割を理解させてくれました」

第2ステップ時代、障がい者雇用の礎が築かれていった。

第7ステップで、一人暮らしと「2直2交替」が実現

97年の第3ステップから、中堀さんは、障がい者を見る目が変わり始めていると感じた。

「障がい者の働く姿を見て、近くにいる社員たちが障がい者の頑張りを少しずつ認めてくれるようになりました。現場の人たちが『こういう仕事は障がい者にできないか』と逆に相談してくるようになったことが大きな成果だと思います。1日のうちの2～3時間を健常者と一緒の工程で、乗用車のキャップ付けなどの

仕事をさせてもらうようになりました」

障がい者自身が後輩に仕事を教えたり、1歩ずつ自立の部分を増やしていくようにもした。99年からが第4ステップ。名張工場で自動車の側突パット（側面衝突衝撃吸収パット）の製造ラインが立ち上がった。

「側突パットの2次加工は、カーメーカーに直接納品される後工程で失敗は許されなかったので心配はありましたが、上司や現場の主任に相談して、できる人から1人ずつ仕事に就かせました。数えなくても作業ができる方法とか、治具を改善しながら作業を進めましたが、思ったより順調にいきました」（中堀さん）

第5ステップでは、徐々に仕事の場を広げていった。第6ステップでは企業内実習を始めたが、自立支援法の改訂に伴う障がい者施設の事情で今は中断中だ。

08年からの第7ステップでは、ラインの中での2直2交替勤務が実現。2人が社宅で一人暮らしを始めた。障がい者が16名に増えたことで、入社前に知的障がい者更生施設で働いていた経験を持つ古川卓也さんが障がい者指導員になった。古川さんは、「簡単な言葉で伝えるようにしていますが、それでも伝わらないことは、一緒に作業して教えています。相手の目線でと心がけています」

昨年8月に加わった職長歴10年の三浦幸治さんは、「障がい者は弱者。甘やかしていいという感覚があったのですが、それは違うと教えられました。知的障がい者もそれぞれの個性があり、性格も違い、健常者と変わりないと知りました。今はブリヂストンの従業員として仕事をしてうれしいと思ってもらえるよう、バランスを取りながら、責任感とやりがいをうまく指導していければと思います」

関岡さんは、障がい者への理解はずいぶん変わってきたと感じている。「当初は、白い目で見られていたといっても過言ではないのですが、第3ステップぐらいから、中堀さんや障がい者が頑張っているのを目の当たりにしたり、朝、あいさつをされたりして、職場の近くの人たちに仕事の提案などの応援をしていただけるようになりました。どうしても理解してもらえない人がいるのは事実ですが、非常にいい雰囲気になってきていると思います」

障がい者指導員の古川卓也さん（写真右）と三浦幸治さん

働くだけでなく楽しみも充実

名張市の本社工場では現在、知的障がい者21名（男性14名、女性7名）、身体障がい者3名が働いている。

工場の1階。プレセット工程では、硬質ウレタンフォームでできた側突パットのバリ取りと2次加工を行っている。作業をするのは全員が障がい者だが、仕事は健常者顔負けだ。

2階のバリ取り・箱詰め工程では、入社12年で、社宅で一人暮らし、その日は1直勤務の中野浩さんが余裕で作業している。ラインに入っても1直しかできないと、2直ばかりの社員が出てくる。2人で交替勤務ができれば理想的だ。1直は8時から16時20分、2直は16時から0時20分まで。

井戸章仁さんは6年目で、後処理作業の工程を担当。その日は2直で出勤してきた。社宅に入って1年半近くになる。「家から離れて初めはさびしかったんですが、一人暮らしは楽しい。テレビで野球を見たりしています」

「ビールばかり飲んだらダメ」と中堀さん。「社宅には管理職の人も入ってい

三重障害者職業センターのジョブコーチ支援を受けて入社した大西正志さん。同センターカウンセラーの中村淳さん（写真右）が声をかける

て気にかけてくれますし、夜勤が心配だったのですが、同じグループの人たちが協力的なのでありがたいです」

岡本賢美さんは入社して8年になる。自動車シートの2次加工の仕事に変わって3カ月。1人で何工程もの作業をこなしている。「周りの人たちと話をするのは慣れてきました」

「岡本さんはいろいろな作業ができます。器用ですね」と中堀さん。知的障がい者21名のうち16名が「重度判定」を受けている。「軽度の人ならどこでも働けます。ちょっと大変な人たちが働けるようになることに、やりがいを感じています。いったん仕事を覚えると、戦力となって働いてくれますね。私は、ブリヂストンに働きたいという思いがない人は採用しないんです」

入社したいと、3年間希望し続けて採用された高次脳機能障がいの人もいる。96年ごろから三重障害者職業センターのジョブコーチ制度を利用。職場実習後に採用を決めている。

「製造業でいちばん大事なのは、誰が作っても同じものができることです。新しいものが立ち上がったときは、どういう治具を作ればいいかを考え、間違いのない仕事ができるようにと考えています。ジョブコーチには、会社では言いにくいことをフォローしていただければと思います」（中堀さん）

障がい者の待遇は常用パート。最低賃金でスタートし、能力評価でアップしていく。

最近は不況でリストラにあい、障がい者合同面接会で中途入社する人が増えていると、関岡さんは感じている。「当社も景気は厳しく、採用面にも影響は及んでいますが、障がい者雇用に関しては別扱いをして、1人でも多くの方が長く働いていただける環境づくりができればと思っています。ご家族の都合などで辞める人もいましたが、定着はいいと思います」

通勤するための交通機関は不便で、バスの本数も減っている。名張駅からはマイクロバスで送迎する。

潮干狩り、ボウリング大会、ソフトボール大会、社員旅行など、社内行事にはみんな参加。そのほかに独自にお誕生日会やバーベキュー大会なども開く。

働くだけでなく楽しみも大事だと、中堀さんは考えている。「ボウリングでも、

中野さんと交替で勤務に入る井戸章仁さん

バリ取り工程で働く中野浩さん

ワイヤー準備工程では杉本規一さんが働く

入社8年。自動車シートの加工作業を担当する岡本賢美（さとみ）さん

三浦障がい者指導員からスケジュール、注意事項などの指示を受けて仕事に取りかかる

自分たちで電車やバスを利用して現地に集まるようにしています。できる人がバスの時刻を調べて、できない人に教えたり、仲間同士で助け合っています。私も仕事には厳しいですが、仕事を離れたときは仲間として接しています。私の想像以上に成長してくれましたね。やってできないことはないと思います」

一人暮らしができる人を増やしたい

休憩時間に、障がい者たちにいくつか質問をした。「中堀さんは怖い人、優しい人」。「三浦さん、古川さんは、優しい」。「これからずっと働き続けたい人？」と尋ねたら、全員の手が一斉に上がった。

E／M製造部長の森利行さんは、09年からプレセット工程を直接見るようになった。

「毎日こちらからあいさつを続けると、あいさつしてくれるようになりました。ルールを大切にして、約束事を守ろうという活動をしていますが、プレセット工程はきっちり守ってくれています。作業現場のサポートも助かっています。自立できるようなレベルになってきたので、09年から交替勤務に入れましたが、仕事ができる環境をつくれば、健常者と同じようなラインで働けると思います。社長の理念もありますので、ここを拠点に障がい者雇用を拡大していきたいと思います」と森部長。

作業の工夫をすれば、健常者と同じように働ける。中堀さんはその推進力となった。「障がい者の人が企業の中で働くのはむずかしい、大変だと言われますが、決してそうではないと思います。できる仕事をどう見つけるか、またできない部分をちょっとフォローすることによって、確実な仕事ができます。ラインの中で仕事をして、一人暮らしができる人を増やしていきたいですね。半年前から準備を重ねて、上尾製造所で2名が働き始めましたが、ほかの事業所へ横展開をしていきたいと思います。障害があっても働けるような職場作りを全国に広めていければと思います」

最後に、障がい者雇用をして大変だったこと、うれしかったことを聞いた。

「障がい者の人が交替勤務に入って、製造現場の一員になっているのがうれしいです」（森部長）

森利行E／M製造部長

「しんどかったのは、出社しない障がい者を自宅まで迎えに行った最初のころです。うれしいのは、どうなるかと心配していたことが、それなりの評価をいただける取り組みになってきたことです」（関岡さん）

「人数が少なかったときは全国に障がい者雇用が伝わっていくことと、自分に余裕がありすぎて先々と手を打ちすぎて、障がい者本人の自立の芽を摘んでいるのではないかと心配でした。仲間が増えてくると、いいライバル意識が出てきて、自分たちから『こんなことします』、『あんなことします』と言えるようになってきたことがうれしいです」（中堀さん）

「みんなとの楽しい思い出は社員旅行でカラオケをしたことです。後を継ぐ者としてプレッシャーは感じていますが、みんなの笑顔を見ていると癒されます」（古川さん）

「彼らは純朴ですから、病気で休むと『三浦さん体大丈夫？』とか気にかけてくれたり、気持ちがいいですね。普段コミュニケーションを取れない人が、仕事の様子を見ると、わかっていたのだと思えたときはうれしいです。やりがいがあって、楽しいです」（三浦さん）

やればできる！ 20年の取り組みをうかがいながら、ブリヂストンケミテックのような職場が広がってほしいと願った。

取材協力：三重障害者職業センター
〒514-0002　三重県津市島崎町327-1
TEL 059-224-4726　　FAX 059-224-4707